

“転注”とは、「車輪が回転する」といふ意味の“転”と、「川の水が流れて海に注ぐ」といふ意味の“注”とを組合せた言葉で、「その位置が現在の地点から次第に移動して行く」ことを表した言葉である。

「漢字の意味が、本来の意味から次第に変化して行って、元の意味とは異った意味に使はれる」やうになった場合に、これを“転注”といふのである。ただし、異った意味と言っても、“車の轍”のやうに、“川の流れ”のやうに、元の意味と“意味のつながり”がある場合に“転注”と言ふのである。

例へば、“文”といふ字は、すでに述べたやうに“模様”といふのが本来の意味の文字である。ところが、“文字”は“模様”の一種であるといふので、“文字”といふ意味に用ひられるやうになった。この場合、“文字”といふ意味に用ひられた“文”といふ文字を「これは“転注”である」と言ふのである。

また、“文”といふ字は“文字”といふ意味から、「文字を書き連ねたもの」「文章」や“文書”といふ意味にも使はれるやうになった。これも“転注”と言ふのである。

また、“字”といふ字は、「家に子供が生れる」とか「家族がふえる」と

いふのが本来の意味の字であるが、今は“文字”といふ意味にしか使はれてゐない。この“文字”といふ意味に使はれてゐる“字”は、やはり“転注”の用法である。

“楽”といふ文字は、太鼓の形(白)を真中に、左右に打楽器を合(木)の上に据ゑた形を表した象形文字であり、“楽器”が本義の字である。

この“楽器”を使って演奏されるものを“音楽”と言ふ。楽器は“物”であるが、音楽は“事”である。だから、“楽器”といふ用法は“象形文字”としての用法であるが、“音楽”といふ場合は、“象形”ではないから“転注”による用法と見るべきである。

さて、音楽を聴くと“楽しい”気分になる。そこで、この音楽の“楽”を“たのしい”といふ意味を表す文字として用ひるやうになった。これも勿論“転注”である。

このやうに、文字が本来の意味に関係のある、然し明らかに別の意味に使はれた場合、これを“転注”と言ふのである。それで、この場合、「“楽”は象形文字であるが、用法は“転注”である」と言ふ。“転注”は造字法の名称ではなくて、用字法の名称なのである。